

異文化理解における自問自答を通じた 信念解明ツールの設計

Design of Belief Analyzing Tool by Self-Question for Cross-Cultural Understanding

峠 貴文¹ 松田 憲幸¹ 瀬田 和久² 池田 満³

TOUGE Takahumi¹, MATSUDA Noriyuki¹, SETA Kazuhisa² and IKEDA Mitsuru³,

¹和歌山大学 システム工学部

¹Faculty of Systems Engineering, Wakayama University

²大阪府立大学大学院 理学系研究科

²Graduate School of Science, Osaka Prefecture University

³北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科

³School of Knowledge Science, Japan Advanced Institute of Science and Technology

Abstract: Our society is becoming globalized in recent years. There, imposing values of own culture has become a barrier to cross-cultural understanding. We need to have an attitude of respecting other cultures in order to avoid belief conflict. In this research, we use the Dissolution Frame to write down opinion, belief, and background. Our system provides a generic question to stimulate a learner's analysis of more different thinking.

1 はじめに

国際化が進むにつれて、自文化とは異なる文化をもつ人々と接する機会が増えている。協調しなければならないシーンであっても、たびたび、互いの立場をゆずらず並行線を辿ってしまうことが見受けられる。互いの意見が対立するとき、相手が意見を持つに至った背景を推定することが重要になると考えられるが、そうするには、一旦、自分の意見を反故にして相手の意見を受け入れ、ものごとを考えなければならず容易ではない。

本稿では、相手の文化背景を推察する前に、まず、自らの意見を反故にする必要がない自文化についてその背後の理由の推定に注目する。そうすることで、自らの意見を反故にする難しさを回避したうえで、学習者が気づいていない根源的な理由を分析する「解明」トレーニングが可能になると考える。

自文化の、特に、当たり前の習慣について、なぜそのような行動をとるのか理由を解明することを支援する信念解明ツールの設計について述べる。

2 信念の解明

意見の背後に隠れた理由を「信念」、信念の背後に隠れた理由を「背景」とよび、それぞれを言葉に書

き表すための解明表現（解明のためのフレーム）を用意した。解明表現は意見、信念、背景の3つから構築される（図1参照）。これらの解明を自分の意見と異なる意見で行い左右に並べて記述する。対立する二つの意見の解明を対比させることで対立の根源的な理由を分析させることをねらう。

対立が深刻であるほど、意見の背後にある信念、および、背景を無自覚に絶対視していると考えられ、その解明は難しい。本稿では、解明の負担を軽減するため、学習者に質問を提示し、その質問への答えを考えさせる過程で、今まで考えたことのない観点からものごとを吟味するなど、より自然に解明を促すことを期待している。

学習者へ提示する質問は、できるだけ個々の事例に依存しないよう、標準的な質問を用意し、これを汎化質問と呼ぶ（表1参照）。医療サービスの文脈で解明の指導をしている京極[1]と共に作成した。

テーブルマナーの解明の例を図1で表す。

学習者は「お椀は手で持って食べても良い」と考えている。この意見に対する理由を分析したところ食べ物を落とすのはもったいないと考えた結果、「食べ物を床に落とさないようにすべき」と記述した。では、なぜ、その信念が生まれたか、その理由を分析して、「食糧難を経験し、米粒一つでも無駄に出来

なかった」という体験がきっかけとなっていることに気が付く。背景がきっかけとなり、信念を持つに至り、また信念がきっかけとなり、意見が生まれるプロセスを整理し、自覚することができる。異なる意見についても同様に説明することができる。

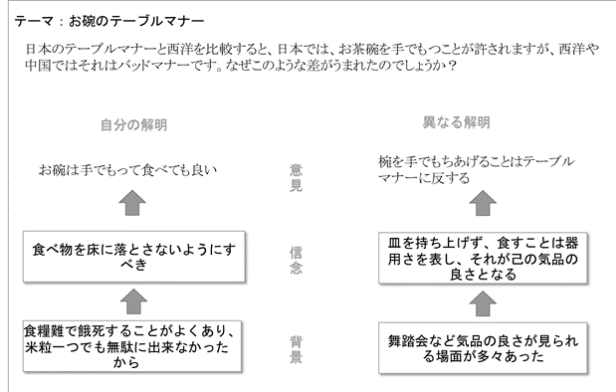


図1： 説明の例「テーブルマナー」

表1： 汎化質問

信念
何に関心があるのか？
どういうことに興味があるのか？
どんな観点、関心からみているのか？
なぜ自分(他人)が意義がある、大事であると考えているのか？
なぜ自分(他人)がそう確信するのか？
背後にどのような意図があるのか？
自分(他人)の関心から考えて、他に価値が見出されることがないのか？
自分(他人)の観点から見て、他にもっと重要になりそうなことはないか？
関心や目的が妥当と言える根拠は何か？
何を欲求しているのか？
どういうことができると思うか？
背景
信念対立に至るまでに何があったのか？
どういう経緯で信念対立に至ったのか？
信念対立によって、どういう状況に陥ると思うか？
現場が置かれている状況は？
何がきっかけで、そのような関心や目的を持つようになったのだろうか？
どういう過程を通じて、そのような意見を持つに至ったのか？
どのような影響を受けて、そのような関心や意見を持つようになったのだろうか？
どういうきっかけがあったから、そういう関心や意見を当たり前だと思うようになったのか？
背景が変われば、どうなると思うか？
自分(他人)の状況や事実の認識が妥当と言える根拠は何か？

3 信念説明ツールの設計

学習者に、最初に、自文化に関するテーマを与える。たとえば、「テーブルマナーでお碗を手で持つことを許すか、許さないか」、「家で靴をぬぐか、ぬがないか」、「人の名前を呼ぶとき、苗字で呼ぶか、名前前で呼ぶか」。信念説明ツールは、説明表現を作成するための画面を提示する(図1)。テーマごとに、あらかじめ、意見について自分の説明と、異なる説明を用意しておき、それが表示される。その下の、信念と背景の4か所のテキストボックスに説明した結

果を記入させる。

次に、汎化質問を用いて説明表現を作成する画面を提示する。画面は左側に汎化質問で説明表現を作成する編集画面(図2)、右側に先ほど作成した説明表現(図1)が表示される。

左側(図2)の中央に縦に信念の汎化質問、および、背景の汎化質問が表示され、学習者は答えやすい質問から自由に記入する。

先の説明の右側と、汎化質問による説明の左側とを一画面で見比べながら説明させることで、先の説明では気が付かなかった信念や背景を自問自答を通して見い出せることに気付かせることをねらっている。また、学習者が、汎化質問を通して、説明には限りがないことに気付くことを通して、普段から、ものごとの背後にある理由を説明しようとする態度を涵養することを期待している。

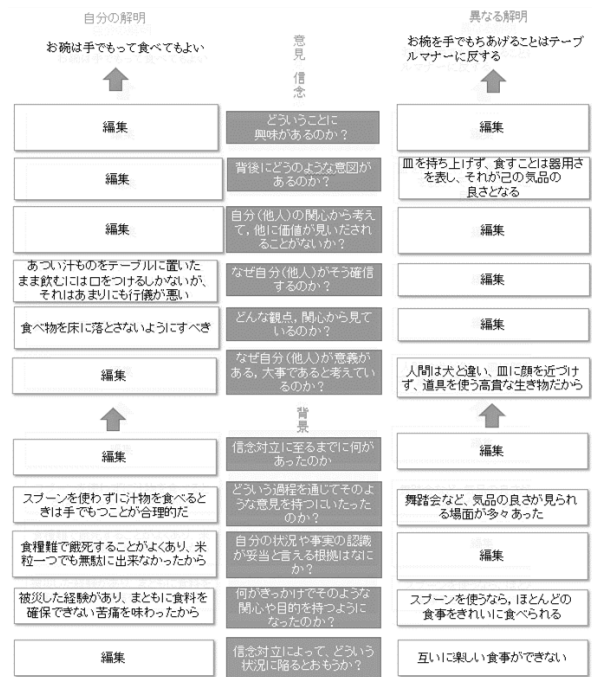


図2： 汎化質問で説明する画面例

4 まとめ

異文化間の意見衝突において、相手の立場や価値観を説明させる態度を養うため、まず、自文化にとって当たり前の意見の説明を訓練するためのツールの設計について述べた。たくさんの汎化質問を提示して、ものごとを多様に、多面的に考えるきっかけを与えるよう工夫した。

参考文献

[1] 京極真：医療関係者のための信念対立説明アプローチ-コミュニケーション・スキル入門-, 誠信書房, (2011)